
ちくは・THE・ストーリー ～～キャラ達の日常～～

ちくは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちくは・THE・ストーリー　　〳〵キャラ達の日常〳〵

【Nコード】

N4114C

【作者名】

ちくは

【あらすじ】

これは、作者の“ちくは”が書く小説のキャラ達の普段を描いた一話完結型の小説です。ちなみに最新は気まぐれ。

その1 岡村 幽霊の日常？（前書き）

第一回は“紅雲先生”のリクエストで岡村 幽弥の日常です。

その1 岡村 幽霊の日常？

ワイの名前は岡村 幽弥、なんか知らんがバカ（狐面）が1日休暇をくれた。

「……………休みつても、やることあらへんな」

ちなみに今朝の5時半、才鬼もまだ寝とるし暇を持て余しとる。

「……………そや！この前給料で買ってきたアレやる！」

……………一時間後……………

「……………借金二億つて……………ワイの運は貧乏神に全部持つてかれてるな」

この前買ってきた、棒を振り回す某ゲーム機と桃太郎が鉄道で競うボードゲームをしていた。

多少凹んでいると才鬼が起きてきた。

「……………おはよう……………」

「おはようさん！チヨチ待ちや今朝飯作るさかい」

才鬼はコクリと頷き指定の席に座り、天気予報を見ている。

「おっはよー！才鬼！僕かつこよくない？」

突然リビングに突入してきたのは同僚の眞壁 凜助、どうしようもないアホナルシストや。

「…………消えて」

才鬼の言葉の攻撃でよろけるがすぐに立ち直る。

「ねえねえ、今日は暇？」

「…………目障り」

ここで強力な言葉の攻撃がクリーンヒットし泣きながらワイに抱きつく。

「うわー、どーゆー育て方したらあーなるんだよー！」

「やかましわ！静かにせんかい！」

なんとか凜助を引き離し、朝食の準備をし終わった。

「はあー、で何しに来たんや？」

「なんとなく」

コイツの相手は疲れるので口にあめ玉を突っ込み黙らせる。

「才鬼、今日昼から“園”で和菓子買ってきてくれへん？」

才鬼は無言で頷き、また味噌汁を飲む。

何だかんだで、時間が進み今は10時、雑用は全て凜助にさせたのでやることはない。

「終わった……才鬼く僕と

「うるさい」グス」

なんか凜助が哀れに見える。

（すまん！育て方間違えたかもしれんわ）

「ええっと……報告書纏めな……凜助！」

仕事を片付け用と立ち上がると同時に凜助が才鬼にセクハラをしよ
うとしていた。

「……………死ね」

才鬼は本気で怒ったらしくすざましい殺気を放った。

「ひあああ？！ちよつと！ぎゃぴ？」

才鬼の右ストレートをまともに受けノックアウトする。

「はあ……アホらし」

「幽弥削除」

少し涙目の才鬼に萌えて……ゲフン！同情して凜助を樹海に捨てて
きた。

「幽弥……………これ」

才鬼は何故かマッチョなオッサンのトロフィーをワイの腕に押し付
ける。

「なんやねん？これ？」

意味は分からんがとりあえず受け取り自分の部屋に飾って置いた。

「才鬼、駅まで送つたるから早く来いや」

「……………ありがとう」

才鬼が絡まれたら相手がヤバいからな容姿は凄くかわええしな、我が妹ながら実に良いものだ……ワイはシスコン？

「何時もより多く入れとるさかい、用事ついでに息抜きもしてきい
や」

「……………うん」

ワイは二万円を才鬼に渡す。

「才鬼……変わったな……これも奏歌の影響か？」

最近妙に楽しそうな才鬼を見送り、フクロウの店に向かう。

「にやはは！ここで会ったが1日と三時間28秒！勝負！」

「細か！」

店に到着すると店の前で小柄でポニーテールパッチリネコ目の女の子が木刀を振り回していた。

「む！そのツツコミの速さ貴方二。ータ。プね?!」

なんや変なのに関わった?!。

「ええっと……多分違うと思うで」

「そんなことより！烏間 京介！しょ、アタ?!」

「うるさいぞ鷲尾！」

中から出てきたのは青いヘプロンを纏った金髪の外国人が出てきた。

「っ！不意打ちか正々堂々と！」

「はぁー、。月×日お前は猫を相手に」

何やらエプロンのポケットから手帳を取りだし語り始める。

「にゃー?!なぜ其を?」

「ニ。ータイ。だから?」

このふたりのやり取りを見ていて店に入れない。

「あつ?!いらつしやいどうぞ!」

やっと築いて貰えてホッとした。

「んゝ、お客様ですか?アー貴方はこの前のー鬼人?」

相変わらず言葉を伸ばして話し終えるのが遅い。

「刀の力封じる鞘が欲しいんやけど?ないか?」

「鞘ですね!少々お待ちを」

ワイはすることも無いので店内を見回す。

あらゆる所に武器や道具が置かれてオススメや希少価値の高い物は特殊な結界が張られている。

「お待たせしましたーすごいやつ」

何処かで聞いたような感じの声で黒く鈍く光る鞘を持ってきた。

「こちら15万になります」

「はいな、ありがとさん」

ワイは現金一括払いで討神塊魔式とっしんかいまの力を抑える鞘さやをかつた。
「なんやろ休みなのに何時もの倍疲れた」

このあと何と無く上機嫌の才鬼を迎えに行き“園”のみたらし団子を堪能し夜の任務をこなすのだった。

完？

その1 岡村 幽霊の日常？（後書き）

難しい、これ書くの早くも挫折しそう（・・・）

その2 鷲尾隆明の休暇

休暇を言い渡されたは良いが……………行くところが無い！

「久しぶり家に帰るか」

俺は適当にカバンへお土産とナツルから買った牛ガラの抱き枕を入れて、ご信用の銃を腰とズボンの間に挟み寮を出た。

「変わらないな、ここも」

六年は帰って無かったのでとても懐かしく感じる。
車を店の駐車場に入れて我が家を見る。

>ケーキ屋・あいあんめいでん<

「……………相変わらず痛そうな名前だ、ただい」

「烏間京介！勝負だあー！」

「なっ?!」

俺は辛うじて、身を反らし飛び蹴りを交わす。

交わされた事に寄り、地面に向かう体を支えてやる。

「何のつもりだ、霧？」

「おお！お兄ちゃん！」

我が妹を降ろし、立たせる相変わらず小さい150位の身長割には程よく発育しており、昔と変わらずポニーテールにしている髪を持ち逃げられない様にする。

「烏間京介が来たと思って……………すいません」

「気にしてない、親父は？」

仕入れと答えてまた、レジ係に勤める我が妹の横を過ぎ荷物を置く。

「店、手伝うよ」

「マジ！少し大変だったのー助かるわ」

さりげなく親父の作るケーキは人気らしく客が良く来る。
この暑い中物好きな人達だ。

「いらっしやいませー」

無表情で接客業つてのもどうかと思うが言われた仕事をこなす。

「ただいまー霧、隆明帰って来てるのか？」

どうやら親父が帰って来たらしく、親父が選んだ選りすぐりの材料を冷蔵庫に入れていく。

「久しぶりだな、隆明！ゆっくりしてけ」

「ああ、そうさせてもらう」

とは言ったものの、ジツとしているより働いた方が落ち着くので結果店は手伝った。

「ふあゝ暇だねお兄ちゃん」

「そうでもない」

霧の代わりに店の掃除をする。

店はそんなに汚れてはいないが、丹念に磨き上げた。

「烏間京介、来ないかなー」

「カレシか？」

霧はキョトンとした顔をして、暫く考えた。

「ライバル？かな」

「そうか」

午後に成りまた、人が増え忙しくなる。

店にいた最後の二人にケーキを渡し休憩をとる。

「お兄ちゃん！ケーキ食べる？」

「いい、紅茶だけ貰う」

3時のオヤツを出されるが甘い物はそんなに好きでもない。

「こんにちは、ぐっ？！霧かよ！」

「ははは！良く来たな烏間京介！」

恐らくボディーブローを食らったであろう金髪碧眼の烏間京介とやらは膝をついてる。

「バカ者、いらっしやい」

「うつつ、いらっしやい」

軽くゲンコツを霧に食らわし、烏間京介を立てせる。

（でかいな、185ある俺よりデカイ）

「すみません、えつとバイトの人」

「俺は霧の兄だよで、ご注文は？」

烏間は失礼しましたと、頭を下げた。

「俺は鷺尾に呼び出されただけなので」

「ひひ！勝負！」

霧が将棋を持ちだし、対局しだす。

しゅしゅ、烏間も前に座り込み駒を動かしていく。

（おいおい、霧を押してるし）

霧はかりにも天才と言われるレベルで、IQ180ぐらいだったと思う。

「うう！負けた！」

「約束どおり俺の野球マンガコレクション返して貰うぞ！」

まさかの烏間が勝ってしまったことに驚いた。

「お前も天才なのか？」

「いえ、俺は只の凡人です勉強とか鷺尾に勝った試しがないですし」

相変わらず悔しがる、霧を烏間がなだめケーキを買っていった。

「ぜ、全敗」

「……………」

将棋の後、様々なゲームをしたが全敗。

霧はふて寝してしまった。

「隆明！食ってみろ」

出されたチョコケーキを食べた、程よい苦味と滑らかな舌触りをし

たケーキ。

「うまいな」

「そうかそうか！」

親父はまた厨房に戻っていった。

「そろそろ閉めるか」

10時になろうとしている時計を見て店のシャッターを卸す。

「隆明そろそろ帰るんだろ？これ持ってけ」

「これは？」

「お守りだ、あんまりムチャすんじゃねえぞ！」

渡されたお守りを胸ポケットにしまう。

「わかつているさ、だが部下を守るのも隊長の勤めだからな」

「いいやがる、行ってこいバカ息子」

親父に頭を下げ、玄関に行く。

「お兄ちゃんは今度はいつ帰って来るの？」

「わからん、だか今度来たときどっか行きたい所あったら連れてってやるよ」

頭を撫でながら、約束をする。

「守りに帰って来てよ、お兄ちゃん！」

「俺は不死身だからな」

俺は車を走らせ、今日の出来事を胸に刻み軍に戻った。

その3 輝の心（前書き）

書きたいことが、上手く文章に出来ない（・・・）

その3 輝の心

やっと仕事を終わらせ、穏やかな午後を過ごす親父のお陰で入れ替わる前とそんなに代わりないが何分メイド達に絡まれる、家事を手伝ってくれたりするのは有難いがカナメの目線が痛いを感じる。早速、メイド達にもらった園のどら焼と緑茶を用意しカナメと過ごすことにした。

「カナメ……寝てるか」

何時ものテンションは無く規則正しい寝息が聞こえるカナメも多忙な毎日だ布団を掛けてやりソファーに寝かせ一人緑茶を啜る。何気無く見ていたテレビを見ながら番組は奥様の悩み事と言うコーナーに入る。

「奥さん今日は、相談をどうぞ」

「はい、実は……夫が全然手を出してくれないんです！」

「?!」

テレビの向こうの相談者と目が会った用な気がするが何故かグサツとなる。

「何度もそんな場面がありますが一回もです！それに最近、弟がほしいの願いがなかったように弟の用な人が出来て構いばなしなんですよ」

「大変ですね奥さん、きっと旦那さんは奥手何ではないですか？」

司会がカメラ目線になり、俺はまた固まる。
渋い顔をし、奥さんの相談に乗る。

「そうですね、奥さん、いつそ二人きりの時に寝てる不利をしてみ
ては？おっとお時間ですね、また来週！」

テレビを消し、心を落ち着かせるために緑茶を啜る。さっきの司会
者の発言が気になりカナメに視線が行ってしまう。

（落ち着け………落ち着け輝、同様するな）

何とか落ち着き、テレビの事を思いだす。

確かに思い当たるフシが有りすぎる、色々な事が会ったが………確
かにだ。

「カナメも不安に感じるのか？……俺は」

「ん………輝」

「?!」

大抵の事で驚いたり、動揺はしないがカナメは別だ。ソツと振り返
ってカナメを見る。

豊かで腰まである艶のある長い黒髪、整った顔立ちにスタイルだっ
ていいそこのアイドルより断然いいだろう。

「ん………うう……寝てた」

「……………」

「どーしたの？風邪かな？」

カナメが立ち上がり額に手を当てるカナメの暖かな手の温もりを感
じ心が落ち着く。

「……輝………いいよ」

「もう少しだけ待ってほしい、俺は親父の様に器用な人間じゃな

い」

「……わかってるよ……でももう少しこのまま」

お互いの温もりを感じる、一年間で人間は変わるものだ人生何があるかわからない。

暫く抱き合ったまま時間がゆっくりと過ぎていく。

「……………メール……………仕事か」

「……………輝！……………いつてらっしゃい！」

「ああ」

そうだ、悩むことなんてない……………ゆっくり進めばいい俺もカナメももう道具じゃない、泣きたいとき哭いて笑いたい時に笑えばいい焦る事はない、今はカナメと皆と過ごす日々を楽しもう。

その4 岡村 幽弥の日常セカンド！前編（前書き）

なぜか出る度に読者数が伸び、リアルでも人気の高いあの岡村が帰ってきた！シリーズ第二段、発動！

その4 岡村 幽弥の日常セカンド！前編

いわずと知れた苦勞鬼、岡村 幽弥やでえー！

なんか、しらんけどワイって人気らしい……照れるわ。

そんなわけで、ワイの日常楽しんでな！

麗らかな午後をまったりと過ごし園で買ってきた大福をほうばりつつ才鬼を迎えに行く準備を済ませ、学校の近くで待機しようとしたが携帯に電話がかかってきたもちろん知らん番号やだって才鬼のしか入れてへんしな！

「もしもし、どなたですかあ？」

「お前の娘は預かった……返してほしければ、二千万円よういしろ、用意できたらまたこの番号にかけてけい」

電話の向こうから聞こえてくる声はプライバシーがどーのこーのって言ってる声やった。

「ちよちよ、ちょっと待ちいいい！……切れてる」

突然の出来事に気が動転しそうやけど、よくよく考えれば才鬼が人間なんかに負けるわけがないんやし、冷静に対象しよ。

「でも、才鬼かわいいからなあ……変なことされなければいいけど

ねっ」

「って、うやあ？！な、なにしとるんよ！自分！」

「歩くのだるい」

いつの間にか助手席に乗っていた我等が大将、略奪者が狐面ごしに笑っている。

「ど！ど！ど！どないしょ！二千万円！！」

「落ち着けよ、才鬼ならほら……ってゴメン間違えちゃった、彼女は西巻　霞って言うんだあ……才鬼にそっくりでしょ」「まあ、家の才鬼のほうがかわいいけどな！それにあないに目付き悪くないちゅうねん！」

たしかにそっくりやけど全体的にやっぱり違うわな……。

「彼女の家、金持ちでさゝ間違えて誘拐されたね、ありや……どうさたんだい？」

「こうしちやおれんは！何とか探しだすんやあ！クソガキ付き合え！」

「いいよ、因みに僕の方が三百年は歳上だよクソガキ」

急いで車のエンジンをかけ発進させる。

「で、勢い良く出たのはいいけどアテはあるの？」

「……どうしょ……」

「バツカだなゝあつた？！」

ケラケラ笑うクソガキに拳骨を入れてやり悶えるのを無視しどうしようか考える。

「そや！西巻って子の家に行ってみるかあ！」

「どーやって？」

某人気ケータイゲーム機の画面をつつきながら略奪者が聞いてくる。
つと言うか、お前もちやつかり現代ツ子にそまっとな……。

「お前家知らんのか？」

「知るわけないよ、だって他人に興味ないし」

「……………」

こいつに聞いたのが間違いやった、車を学校に向け発進させる時間がないけど強引な方法を取る。

シートベルトを外しエンジンを止める、そして空間転移で人気のない四棟にでる。

「一回挨拶に来といてよかった」さて、校長室はつと」

途中何度か生徒に出くわしたがたまたま置いてあった段ボールに救われた、幾度のエージェントが段ボールで救われたのはあながち間違いないかもしれない。

「気配はないな……よしや……こんなこともあるつかとパソコン検定一級は習得済みや！」

ちよちよいとパソコンをいじりデータを閲覧すぐに覚えて空間転移で車に戻る。

「お疲れ……ふあ〜」

「なんや？眠たいんか？」

「少しね、で分かったの？」

ワイは頷き車を発進させる全くガソリンもただやないっちゅーねん

！

15分後。

「でつか……」

狩崎の所よりは劣るけど立派な家やさすが医者つてところやな……。
危ないお兄さんもおるしなせやけど、かまってられへんは！

「なんだて……おふ！」

「お！………」

素早く二人の門番を気絶させ門を通る、空間転移で行ってもよかったけど目立つのは余りよろしくない。

「………ここか？」

途中やたら自分は腕がたつとかほざく人間がおったけどできるだけ無傷に気絶させて来たのだ、少し疲れたわ略奪者を家に返して正解や無駄に返り血を浴びるからな。

時刻はもう七時を過ぎてしまったナビが壊れて迷ったのが不味かったなあ。

「誰だね？！君は！」

「落ち着けや、にんげ……おっさん」

どうやら一家団欒？で夕飯らしいが無視しておっさんの前に行く、家政婦たちの同様の声はおっさんが手をあげるとおさまった。

「目的はなんだね？」

一般の人間にしてはいい目をしとる、ダンディーって言うんやっけな……。

「あんたとこの娘とワイの妹が間違えられてさらわれたんや、どうしたらいいんや？」

「ちょ！マジかよ！」

今まで生きて来て五百年と二十七年やけどこんな経験初めてや今更ながら顔が青くなるのが感じる。
そして西巻の娘……才鬼の顔で男みたいな口調やめて。

「お、おおお！」

「落ち着けよ！で！あんた何者！」

慌てだしたおっさんを一喝し西巻の娘が意地悪そうな笑顔でワイを見上げる。

才鬼はそんな顔はしない！

「……ただの関西人や……で、二千万円」

「な、なぜ私が払わなければならぬ！私達は関係ないだろ！」

さっきの同様を引きずりながらもワイに向かってどなる。

「……ワイに金を要求されても出せへんし、あんたの娘が家の妹とそっくりなせいで巻き込まれる形になつとるんやで」

「し、しらん！」

とことんワイを毛嫌いしとるらしいけど、別に気にならへん。

「……あんだ…結構裏でヤバいことやっとるらしいやん」
「っ！」

「こんなしたくないけどこのデータなにか分かつとるよな？」

「どうして……わかつたよ二千万円だな」

観念したのか小切手をちぎり渡してきた、そして誘拐犯のケータイに電話をかけ場所に行けと説明された。

「うし……やっぱ現金に変えれんか？」

「無理だ……現金はこのいえに置いてないんだよ」

またグダグタと言いつついいはじめたオッサンを見ていると肩を叩かれ下を向く西巻の娘が何が嬉しいのかニヤニヤしながら手を引く張る。

「物は相談だが、二千万円の現金を用意してやるから霞と一緒に連れてってくれよ！」

「はあ？なんでやねん……家出でもしたいんか？」

「なわけねーだろ！連れてってくれよ！」

ああ！しがみつくな、服が伸びる！と剥がしたいが何分、才鬼と顔がかぶって見えて顔がニヤケそうや。

「あーわかつたから、はよはなせ！ほな、いくで」

「よっしゃー！悪の組織に立ち向かう美少女探偵！霞と白髪の助手！はたして霞は悪の組織の陰謀を阻止できるのか！続く！」

テンションの高い人間だと思い憂鬱になるが顔を叩き気合いをいれる。

待ってる才鬼！すぐお兄ちゃんが助けにいくからなあ！

少し待っててくれ！と言い残し車でまたされる。

暫くするとヤケにパンパンになるまで詰め込まれた茶色い鞆を持ってきた。

やっぱ家出か？

しかし、なぜか……。

「よしっしゃ！助手！犯人確保だ！これを着ろ！」

「……ホームズの格好……んで、ワイはワトソンなわけやな、はあ」

だいたい予測出来た……あの大量の荷物はおそらく大量のコスプレ用の着替え、そしてこいつはコスプレイヤーかもしれん。

「早くしろ！ほら、犯人は待つちゃいけないぞ！ワトソン君！」

「うっさいわ、ちょっと待てや！」

クソー、才鬼に似とるから、つい言うこと効いてしまっわ。
しぶしぶ着替えを済ませ、車をだす。

「ちょっと寄りたい所がある、現金がいるんだろ？」

ワイは頷き、西巻の指示に従い目的の場所につく。

“東西地探偵事務所”と書かれた看板の横にあるドアに入っていく
西巻を見送りもう一度看板をよくみる。

「確か……対異能処理局の本拠地？…西巻はこの所属か？なんの
力も感じんかったけどな……まあ、ワイは関係ないわな」

対異能処理局は海外もしくはエミティの用な多次元の勢力に対する

能力による事件を処理する人間どもの特殊部隊やったと思う……まあ、我が主である神鬼の力が怖くてエクソシストやシャーマンやら知らんが牽制くらししか出来んやろうし、暇なもんやろ。

「待たせたな！東西地の奴を起こすのに戸惑った、ほら現金、重いから早く積んでくる！」

「……サイで」

トランクを持ち助手席に置きようやく発進する、暫く海のほうに進むとベタ？なことに真つ暗な倉庫が建ち並ぶ港にきた、そしてワイは先に行つててと言い残し車から追い出された。

「……来たで、出てこいや」

「よ、よ、よ、良く着たな取り敢えず助けてくれ」

「……才鬼、離してやれ」

「うん」

倉庫の扉が少し開いていたし才鬼の気配も感じたので入って見ると周りにはぼこぼこにのされた不良がザツと二十人、そして全身に全身にあらゆる刃物を突き付けられて半泣きの髭ズラ親父が震えながら此方に助けを求めている。

「ひいひい！」

「迎えに来たで、才鬼」

「うん」

この様子やと勢いでさらったものの才鬼の逆鱗に触れたようやな。周りを囲んでいた武器が消え、魂が抜けた用な顔を瞬時に切り替え馬鹿らしい人間の科学で作り上げた銃を此方に向けてくる。

「か、金は！」

「ほれ、二千万や」

トランクを持ちオヤジの前に持っていく。

「ほな、行くで」

「ちよよよつとまてえい！！」

トランクをオヤジの手に押し付け銃を奪い握り潰す、ひいと悲鳴をあげ後退り仕様としたが怒声が響く。

「悪党め！とっ捕まえてくれる！」

某ドロボウの三代目を捕まえることに生き甲斐を感じる刑事の格好をした西巻が手錠にロープをくくり着けた物をブンブン振り回している。

「な、なんだ西巻の娘が二人？」

「お縄につけえい！逮捕だあ！」

「やかましいわ！」

西巻はなんかしらんが一人で盛り上がりドンドン、テンションが最高潮に達した時に口を塞ぐ。

オヤジも混乱しとるようやし、ワイもうるさいのは好きじゃない。

「おーい、おっさん確りしいや」

「おお！西巻の娘が二人？！」

「はあ、西巻の娘はあのとつっあんの格好の子や、あんたが誘拐したのが家の妹や」

「……じゃ、最初からこの計画は失敗なのか？！」

「計画？」

急に顔色が悪くなりガタガタと震えだす、そして力無く倒れた。

「使えねえぜ……憂さ晴らした、その悪魔殺してやる！」

「……ワイのことか？」

タバコの火を消し携帯灰皿にすて此方を睨んでくる神父を睨み返す。

「そうだ！この正義のエクソシスト！マーズがお前に引導を渡してやろう！東西地へのリベンジはそれからだ！」『きゃーマーズ様ステキ〜』

神父がビシツと此方に指を指し、乗っていたコンテナから飛び降りる、そして純白の羽に白いスーツを来た小学生くらいの少年の用な天使が薔薇の花びらを散らしている。

「ほう……天使と契約しとるんか……しかもアンさん自身もなかなかの手練れのような“手品師マーズ”はん」

「はーはっははー！俺を知っているようだな！グリムあの悪魔に制裁を加えるぞ！」

『はい♪マーズ様！』

「……ワイは悪魔やないで！誇り高き鬼や！あんなゲスな連中と一緒にすんなや！」

さりげに西巻の娘に取ってきてもらった、刀神傀儡・式式を構える。重さに文句を言うつつたけど頭を撫でてやると機嫌を直してくれたようや。

「はーはっはは！手品師の力を見せてやる！グリム」『はい』
「ほざけ人間が才鬼、車で待つといて！」
「うん」

西巻の腕を引っ張りながら車に向かう才鬼を見送るときゃーきゃー
煩い神父が鬱陶しい笑い方で緑色の空間からマシンガンを一挺とり
だした！

「はーはっはは！純銀製の弾丸だあ！喰らえ悪魔め！」
「あだだだだっ？！あつつ痛いやないか！」

数撃ちやあたるとは良く言ったもんや見事に命中してダメージをも
らつてしもた。空間転移で目の前に行き、上段切りを繰り返す神父
はマシンガンの片方を盾に0距離で発砲しようとしたが直ぐに空間
転移で回避し左手を掴みコンテナに叩き付けてやった神父は勢い良
くぶっ飛び痛そうな音を立て壁にぶつかる。

「ふう……なんや？天使憑きのエクソシストやしもつちよと根性を
だしたらどうや？」

「ええい！悪魔め！グリムなぜ純銀製の弾丸の効果が薄いのだ！」

『ええ結論はですね、対悪魔用にルーンを込めたので対オニには効
きにくいんです』

「なあにいいい！ならば直ぐにルーンを打ち直せ！セイバーをだせ
！」

『ええ？！そんな急にいわれても無理です、セイバーなら出せます
が……』

「ええええいいいい！！その悪魔！」

「悪魔ちやうわ！」

オニが親切に待ってやっていると偉そうになんか腹立つわ！

「この勝負は預け！」

「逃がすか！」

「おが?!」

神父を蹴り倒し気絶させるそのまま引きずり車につく直ぐに才鬼に鎖を出してもらいグルグル巻きにしてやった。

『あの〜』

「なんや？」

『マーズ様をどうするおつもりで？まさか?!』

「……別に殺しはせんよ……西巻コイツに見覚えは……って、今さらワイの事を警戒せんでもええやん」

才鬼の背中に隠れて出てこない、そんな西巻に溜め息を付き出来るだけ笑顔で手招きする。

「お、お前鬼人なんだな？東西地の言つてたのと随分違うけど……」
「あんなあ……みんながみんな悪い奴な分けないやろ？人間も同じやん、でコイツに見覚えは？」

暫く考えてから、あつと声を上げてワイを見る。

「確か夏に皆で海にいった時に東西地に行きなり『好きだ!』とか言つて抱き着いた挙げ句、姫守にぶっ飛ばされたヘンタイだ!」

「……そうなんや……おいグリムやつつたけ？」

『あ、はい』

「コイツの目的はなんなんや？」

ビクッと顔をひきつらせ、神父を二度三度チラチラ見ながら、仕方

ないなと呟きワイに真相を話し始めた。

『本来の目的は日本の霊的技術の研究と調査ならび謎の高エネルギー体の調査なんですが……来る途中に船から落ちてしまい流れ着いた浜にいた東西地さんに一目惚れしてしまいました』

「で？」

『たまたま覚えていた西巻さんに東西地さんと仲良くなる方法を聞こうと頼んだしいです』

とてつもなくドツと疲れが込み上げて来た久し振りの休暇をフルに使い才鬼をさがしたのに原因がこのボケ神父のくだらない願いなんてアホらしすぎる。

「……………才鬼、西巻帰るでグリムその神父を運ぶの手伝ってや」

『はい♪』

西巻を東西地探偵事務所に降ろしたまたまあったダンボウルに神父を詰め込み適当な住所をかき送ってやることにした、因みにブラジルに届くよていだ。

「大丈夫かよ？この神父？」

『大丈夫です、マーズはエベレストで半年迷子になっても生きてましたから』

「……………変なやつやの」

神父の生命力に呆れながらもコンビニに持っていき送ってやった、あの天使も憑いということやし心配ないやろ。

「さてワイらも帰るで！」

「うん」

「お、おい！実はここ喫茶店なんだ暇な時は来いよな！人間でも魔

の住人でもお客は神だから！」

探偵事務所やなかったんやと思いつつ、頷きワイの長い…ほんとーに長い！日は終る分けには行かず直ぐ様任務がはいるのだった。

！完！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4114c/>

ちくは・THE・ストーリー ～～キャラ達の日常～～

2011年1月14日04時06分発行